

曾根崎心中

お初
徳兵衛

客入れ

暗転

音楽

照明、うつすらと(音)

舞台上、男物の着物と女物の着物が掛けてある

清水登場、女物の着物を羽織る

お初　今の命は一度きり、一度きりだからこそ、お祈りをしなければいけない。
一度きりだからこそ、願いは、今叶えてもらわなければいけない。
今の命は、一度きり。
前だ次だと考えずに、心の全部で観音様にお祈りして、心の全部で誰かを好きになったら
良い。
誰かを好きになって初めて、私たちは真剣に祈るということをするようになる。
観音様は、恋を悟りの架け橋に、私たちを彼岸に渡らせ救ってくれる。
徳さま、徳さま。
私ね、心の全部で観音様にお祈りをしてきたの。
徳さまと一緒にになりたいつて。
私は今、心の全部で幸せを感じてる。
徳さまは。
大丈夫。
そんなに震えていては、深く切り込むことができませんわ。
大丈夫。
もっと近くに。
私たちがこの世で最後に見る景色。
徳さま、私を見て。
目を見開いて、私を見て。
私と、私の目に映る見て。
徳さまの目に映る私が見える。
徳さまが綺麗だと言ってくれた、私が見える。
本当だ、本当だ。
私も綺麗だ。
徳さまと同じくらい綺麗だ。
さあ、徳さま

暗転

音楽

照明、ゆっくりと(オレ、ジ)

清水、女物の着物を羽織る

お初

徳さま、徳さま。

やっぱり徳さまだ。

え、何でここにいますのかつて。

今日はね、馴染みの客が、観音様めぐりに出してくれたの。

馴染みの客つて言つても、粹もわからない、田舎者のケチな男。

でも、そんな男でも、誘つてくれなきや、私たちが、蜷川の橋を渡つて、あの街を出る、とができないことは知つてるでしょ。

夜明けもまだの時間から、三十三か所廻つてきたの。

::

あの街に来た時、天満屋の姐さんに言われたの。

観音様は、三十三にそのお姿を変えて、

恋で導き、愛で教えるんだつて。

その時は、私、姐さんの言つてる意味がさっぱり分からなかつたけど、

今なら分かる。

徳さま、あなたと出会つた今なら分かる。

だから、どんな嫌な客でも、観音様めぐりに誘われたら、私は嬉しくて嬉しくて、

え

途中でくたびれて、駕籠にのつて、物見に行つたわ。

この茶屋で待ち合わせることにしてたんだけど、まだ来ていないみたい。

でも、いつ来るか分からないから、そのままいて。

::

私今日、思つてたの。

天満屋を出た時、

まだ夜が明けてなくて、

空が暗く、静まりかえつてゐる時に、

うつすらと空が白んで、星が空から去ろうとしてゐる時に、

観音様をめぐつてゐる時に、きっと徳さまに会えるんじゃないかつて。

思つたんじゃない。

確信してたの。

絶対に徳さまに会えるつて。

::

でもね、何て声をかけたら良いものか。

こんなに長い間、無沙汰で、もし、他の人に心変わりをしていたらどうしようかつて。

会いたくて、会いたくて、しょうがなかったのに、
同時に不安で、不安で、たまらなくなった。
でも、徳さまを見つけた途端、
色んなことを思っていたのにもかかわらず、思いよりも先に、声を出してたの。

::

徳さま、長い間音沙汰なく、何をしたの。
こちらから文を送るわけにもいかないし、
私は不安で不安で、
徳さまの友達に聞いたところでは、ふるさとに用があつて帰つたとか、
でも、それたつて本当のことかどうかわからないじゃない。
知りようもないし。
私がどれだけ不安だったか、分かりますか。
あんまりの仕打ちじゃありませんか。
私が不安で病氣になったら、徳さまのせいですよ。
いや、もしかしたら、とつくに病氣になっているかも。
分からないじゃありませんか。
だったら、ご自分の手で確かめてみたら良い。

::

どうですか。
徳さまの顔を見て、治ってしまったのかもしれないわね。

::

どうしたの。
何でそんなに浮かない顔をしてるの。
徳さまは嬉しくないのですか。
初が目の前にいて、嬉しくないのですか。
まさか、本当に、誰か、私の知らない誰かに、心変わりをしたんじゃ、

::

本当に。

::

本当に、本当ですか。

::

ええ、確かに。
徳さまの手は、本当だと言つてます。

::

良かった。

::

でも、本当に、今まで何をしてたというんです。
こんなに長い間、音沙汰がなかったこと、今までなかった。
用立て出来ないなら、言つてくれれば、身揚りだつてするし、
そんなことは一切気にしないで、前にも言つたじゃないですか。

::

ええ、聞きます。いや、聞かせて、私を納得させてください。

暗転

音楽

照明、ゆつくりと（白っぽく）

清水、男物の着物を羽織る

徳兵衛 ちよつとお待ちになつてください。

旦那様、今何で。

::

ですから、その話は、何度もお断りしたはず。

::

そんなことは。

::

旦那様から受けた恩は、絶対に忘れることができないことです。

忘れようと思つても、忘れられません。

実の子じゃないということ、母親から存外に扱われていた私を、この店に下種として引き取つてもらい、実の息子のように、いや、実の息子以上に接して下さつて、

私がどれだけ幸せだったか。

旦那様に褒められることが、どれだけ嬉しかったか。

褒められたら、もつと褒められるように、

怒られれば、次は褒められるように、

旦那様から受けた恩を少しでも返せるように、私は必死で頑張つてまいりました。

ですが、今の話だけは、

::

滅相もございません。

私がお嬢さんを嫌う理由なんて、どこにもございません。

姿も美しければ、器量もある。

むしろ、私にとっては、過ぎたる存在。

嫌つてなどいるわけがありません。

::

ですが、

::

ですが、

::

はい。

夫婦になりたいと思つている女子がおります。

::

そうです。

新地の天満屋の初という女子です。

::

騙されてなどおりません。

初に限って、そのようなことは。

確かに初は遊女です。

ですが、誰が好き好んで遊女になりましょう。

私は運よく、旦那様に、丁稚として引き取ってもらったことができました。

しかし、初は、運悪くも、遊女として売られてしまったんです。

遊女であることを、何故に責めることができますよ。

私と初は、環境こそ違えど、同じ境遇のものと言っても良いかもしれない。

決して、騙されてなどおりません。

確かに遊びになれていない私ではありますが、その位は分かります。

初と私は、お互いを好んでいます。

初には私が、私には初が、必要なんです。

ですから、お嬢さんをもらうことは、できないんです。

::

申し訳ありません。

失礼なことを言ってるのは、自分が一番理解しているつもりです。

旦那様にも、お嬢さんにも、恥をかかせているのだという事も理解していません。

ですが、

どうしても、お嬢さんと一緒になることはできません。

申し訳ありません。

::

どういふことですか。

::

一貫の持参金。

何のことですか。

::

母親に。

何故、母親に一貫もの金を。

それは喜ぶでしょう。

ですが、それは、私の縁談を喜んでるんじゃない。

存外の子、捨てたはずの子から、何の因果か、一貫もの金をもらえるんです。

縁談を喜んでるんじゃない。

一貫の金を喜んでるんです。

旦那さまだつて、それくらいお分かりになつてるはずでしょう。

::

待つてください。

待ってください。

::

あんまりだ。

旦那様、それはあんまりだ。

当の本人には、何も知らせずに、

母親に金を押ませまで、

そんなの騙してるも同然じゃないですか。

結婚といえば、一生のこと、

それを自分の知らないところで、そんな風に決めてしまうとは、一体何事ですか。

旦那様、それはあんまりだ。

::

大金と一緒にお嬢さんをいただいて、

一生機嫌を取りながら、私に生きていけと言っただけですか。

そんなのまっぴらだ。

::

旦那様がその様な卑怯な手を使うのであれば、

この徳兵衛、どうあつても、この縁談、お受けするわけにはいきません。

断固として、お受けするわけにはいきません。

::

そんな。

::

金を返せですつて。

そんな無茶な。

旦那様も知つてらつしやるでしょう。

あの母親が、

::

しかし、

::

旦那様、確かに私は、旦那様にむかつて、生意気な口をききました。

どのような罰でもうけましょう。

それ位の覚悟は、当たり前もつておりました。

ですが、旦那様も私の母親を知っているでしょう。

私がどうやって、母親から金を返してもらつことができるでしょう。

::

待ってください。

私の立場で二貫もの金を用意しろというんですか。

そんなことができないことも分かっているでしょう。

旦那さま。

旦那さま。

旦那さま。

暗転

音楽

照明、ゆっくりと (青白く)

清水、女物の着物を羽織る

お初

徳さま、徳さま。

起きてる。

::

良かった。

::

眠いはずがない。

徳さまと一緒にいるこの時間が、この時間だけが、私は生きてるの。

寝るなんて、なんてもったいない。

::

徳さま。

初めて私を見たとき、背中に氷を入れられたような気がした。

それなのに、顔が火照ったつて。

何で恥ずかしがるの。

何度だって聞きたい。

その言葉が私を生かしてくれるんだから。

::

私も。

私も、徳さまを初めて見た時に、

細い爪で背中を引つ掻かれたように思ったの。

::

運命つてのは、そんな風な合図で私たちに教えてくれるのかもしれないのね。

::

天満屋の姐さんに、昔言われたことがあるの。

男なんて好きになるものじゃない。

好きになつたところで、得することなんて、一つもない。

::

私にとって、天満屋から見える空は、ずっと暗い空だつた。

空だけじゃない。

私たちが、自分の意思で越えることができない、蜷川の川の色も、

新地の空気も、

目に映る全ての物が、暗く、陰湿なものだつた。

::

ある時、同じ姐さんが私に言つたの。

恋のない人生なんか、その辺の犬にくれてやるつて。
うちらみたいな女は、恋して初めて、生きるつてことを知ることが出来るんだつて。
初、あんたにも、いつかきつと分かる日が来る。
その日が来るように、姐さん、祈つてあげるからねつて。
姐さん、いつも綺麗だったけど、あの時の姐さんが一番きれいだった。

::

徳さま、最近、私はようやく姐さんの言つてたことが分かったの。
天満屋から見える空が、変わったの。
蜷川の川の色が、変わったの。
新地の空気が変わったの。
人を好きになるということは、そういうことなんだつて。
そして思うの、
あの蜷川の橋を越えて、徳さまと一緒にになりたいつて。

::

でも、私には分からない。
あの橋を越えた先で、どうやって生きていけばいいのか。
徳さま。
徳さまが明け方に帰る時、私は、身体の半分が引きちぎられたみたいに、辛くなります。
朝なんて来なければいい。
朝が来なければ、徳さまは帰らなくても良いんだから。
徳さまを見送らなくても良いんだから。
でも、普通の夫婦はどんな生活を送っているの。
徳さまのご飯を作つて、一緒に食つて、
休みの日には、一緒に芝居を見に行つて、
柳の木の下で、一緒に涼んで、
私には普通の生活を思い浮かべることができない。

::

不安で不安でしょうがない。
でも、これだけは言える。
私は徳さまに会うために生まれてきたの。

::

本当に信じていいの。
私と一緒にいるつて。

::

暗転

音楽

照明、ゆつくりと(白っぽく)

清水、男物の着物を羽織る

徳兵衛 九平次に騙されたんだ。

::

初も知ってるだろ、俺が手代になった祝いに、俺を新地に連れてきた男だ。

そうだ、あの九平次だ。

俺は九平次のことを、真の友だと思っていたし、兄のように慕っていた。

それがまさか、

::

そうだつたな。

順を追って話そう。

旦那様の、俺を丁稚として引き取ってくれた、叔父さんのお嬢さんを嫁にもらうという話は、前々から出ていたんだ。

もちろん、断ってる。

だが、旦那様は諦めてくれなかった。

あろうことが、俺の母親に、一貫もの持参金を掴ませ、縁談を進めようとした。

::

まさか。

初、誓ったはずだ。

一緒になろうと。

俺の気持ちに偽りなどない。

俺もお前と同じ気持ちだ。

::

旦那様に、どんなことがあつても、お嬢さんとの縁談を受けるわけにはいかない。

そう答えたよ。

俺も興奮して、相当なもの言いだつたつてのもあるが、

息子のように、面倒を見てきた俺にそこまで言われて、旦那様も怒り出して、

遂には、俺の母親に掴ませた一貫の金を返せと、

更に、店も出て行けと、この地を二度と踏ませないと。

::

一貫もの大金、実際俺にはどうすることもできないし、

田舎に帰って、母親に金を返してくれるよう頼んだよ。

予想はしてたことだが、母親は「うん」とは言ってくれなかった。

あろうことが、一銭残らず、使い切ったとまで言いやがった。

そんな大金、そんなすぐに使いきれないわけがない。

返す気なんて、さらさらないんだ。

::

そこから俺は、京に行き、俺のことを鼻真にしてくれる問屋に言ったんだが、やはり、一

貫もの大金、用立ててくれるはずもなかった。

::

俺はもう一回、田舎に戻って、頭を下げて、村の人の協力を取り付けて、

何とか、母親から金を返してもらったんだ。

ああ、そうだ。

金は返してもらったんだ。

::

九平次に騙されたんだ。

俺は九平次のことを、真の友達と思っていたし、兄のように慕っていた。

初と合わせてくれたのも、九平次だ。

それなのに

それなのに。

::

俺は、母親から金を返してもらって、帰って来て、ぼったり九平次に会ったんだ。

そしたら、九平次は、見るからに困り果てていて、

もちろん、俺はそんな九平次の姿を見たくない。

九平次が困っているなら、助けてやりたい。

それが友達つてもんだろ。

だから、俺は何があつたのか、九平次に聞いたんだ。

でも九平次はなかなか答えない。

しつこくしつこく聞いて、九平次はようやく俺に答えてくれた。

::

金に困ってるって。

驚いたよ。

俺だって、寸前まで金に困ってたんだ。

その辛さは誰よりも分かってやれる。

そうだろ。

::

何に入用なのか、聞いても答えてくれないが、

とにかく明後日には、金は入るというんだ。

今日を乗り切れればって、

見るからに、困り果ててたんだ。

俺もきつと、九平次と同じ顔をしていたと思った。

::

そんな話を聞いて、黙ってられるか。

金が入ったらすぐ返してもらって話で、俺は、返してもらった一貫の金を、九平次に貸したんだ。

::

それなのに

それなのに

一日たつても、二日たつても、九平次からは何の連絡もない。

俺は旦那様に金を返す期限が、どんどん迫って来ている。

九平次に連絡を取りたくて、九平次の店に行っても、そぞろ扱われ、一向に九平次と会う

ことすらできない。

::

そしたら昨日だ。

水茶屋で九平次に会ったんだ。

あいつ、仲間を引き連れて、良い感じで酔ってやがった。

::

もちろん言ったよ。

九平次、金はどうした。

俺も入用なんだ、返してくれないか。

そしたら、あいつ、何て言ったと思う。

::

何のことだ。

何の因縁だ。

お前に返す金なんぞ、借りた覚えがない。

そう言ったんだ。

::

考えらえるか。

俺は真つ白になったよ。

でも、思いだしたんだ。

俺が金を貸す時に、あいつ言ったんだ。

俺は、俺とお前の仲だ、そんなものいらないうて言ったんだが。

いや、と言うんで。

手形を作ったんだ。

あいつは右手に包帯を巻いて、喧嘩でもしたんだらう、手が不自由だったんで、俺に書いてくれって、

あいつの言葉通りに書いて、あいつに渡された判で、

あいつの言うままに、手形を作ったんだ。

それを思い出して、あいつに見せてやった。

そしたら、そしたら、

あいつ、

その手形は無効だ。

お前の字じゃないか。

お前が自分で書いた手形で金を返せって、お前は盗人かって。

ああ、判は九平次の判だ。

だから、この字は、確かに俺が書いたものだが、書かせたのはお前だし、納得して、こゝにお前の判があるたらう。

そう言ってやったよ。

::

全て、全て、最初から、

あいつ、その判は、俺に金を借りる前に、落として、違ふ印判を役所に届けて、

その判自体、俺が盗んだっただけ。

俺は、九平次の判を盗んで、勝手に手形を作って、…罪人にされた。

::

九平次に騙されたんだ。

::

誰も、俺の話聞いてくれなかった。

誰も、俺の話聞いてくれなかった。

抑えられなくて、九平次に殴りかかったが、多勢に無勢、返り討ちにあつてこの様だ。

::

もう終わりだ。

::

初、すまねえ。

初、すまねえ。

初、すまねえ。

暗転

音楽

照明、うつすらと(青)

清水、男物の着物を羽織る、女物の着物を手に持つ

徳兵衛 初、すまねえ。

初、すまねえ。

初、すまねえ。

店も出され、

罪人になり、

俺は、もう、どうにもならない。

::

何を言ってるんだ。

お前のせいなんかじゃない。

何で後悔する必要がある。

俺は、お前に会うために生まれてきたんだ。

そらだろ。

::

そらだな。

徳兵衛、女物の着物の袖で、自分の首を掻く切ら素振り

どうにも行けないなら、一緒にいよう。

初、ありがとうございます。

初、ありがとうございます。

初。

清水、男物の着物の上に、女物の着物を羽織る

お初 徳さま、もう何も言わなくても大丈夫。

徳さまが正しいことは、お天道様が、一番分かってます。

いや、お天道様が分かってなくても、私がちゃんと分かってます。

どうすることもできないなら、

残された道は、ただ一つ。

::

徳さま。

徳さま、私の方こそです。

徳さま、ありがとうございます。

徳さま、ありがとうございます。

徳さま。

清水、舞台を一周周り、二人で逃げてる様子

照明、天の川

清水、立ち止り

お初 徳さま、この蜷川を、徳さまと二人で越えたかった。

それをどれだけ夢見たことか。

私たち、新地の女子は、この蜷川が織姫と牽牛を永遠に隔てる天の川だつて。

その川を徳さまと二人で越えていけるなんて。

清水、舞台を一周周り、二人で逃げてる様子

照明、天の川(うつすら)

清水、立ち止り

徳兵衛 初、見てみる。

この木。

松と、棕櫚が絡み合ってる。

抱き合うように、絡みあってる。

こゝで。

お初 こゝで。

音楽、流れたままの中で

徳さま。

私ね、心の全部で観音様にお祈りしてきたの。

徳さまと一緒にいたいって。

私は今、心の全部で幸せを感じてる。

徳さまは。

大丈夫。

そんなに震えていては、深く切り込むことができませんわ。

大丈夫。

もっと近くに。

私たちがこの世で最後に見る景色。

徳さま、私を見て。

目を見開いて、私を見て。

私と、私の目に映る自分を見て。

徳さまの目に映る私が見える。

徳さまが綺麗だと言ってくれた、私が見える。

本当だ、本当だ。

私も綺麗だ。

徳さまと同じくらい綺麗だ。

さあ、徳さま

さあ。

清水、女物の着物を脱ぎ、刺す

紙吹雪

徳兵衛 初、ありがとう。

俺も、すぐに行く。

そして、ずっと一緒だ。

清水、男物の着物で、自分を刺して、女物の着物と絡みあうように倒れる

照明、暗転